いぶやの杜（もり）

第７号
令和４年１月
揖夜神社
総代会

新春のご挨拶

第二十六代宮司　井上　眞澄

新年明けましておめでとうございます。

年頭にあたり謹んで国の隆昌と皇室の弥栄、氏子の皆様のご健勝をお祈り申し上げ、御祭神の御神徳のもと良き年となります事を衷心より祈望いたします。

令和三年も新型コロナウイルス感染症が全国的に蔓延し、国民生活はもとより社会活動等あらゆる分野に多大な影響を及ぼしました。

当神社に於きましても例外ではなく、穂掛祭、一ツ石神幸祭につきましては令和二年、三年と祭典縮小の止む無きに至りましたが、新型コロナウイルス退散を願って、奉賛会主催で例年になく大規模に花火を打ち上げていただきましたことは、とても感慨深いものでした。

このような状況にはありましたが、すべての年間神事・行事を総代、神社委員、奉賛会、敬神婦人会、氏子青年会、いざなみ会をはじめ氏子の皆様のご協力を得て、無事に遂行・ご奉仕できましたこと心より御礼申し上げます。

まだ暫くは新型コロナウイルス感染症の影響でストレスの溜まる窮屈な生活が続くと思われますが、皆様におかれましては、できる限りの予防をして戴き、ご自愛下さいますようお願い申し上げますと共に、令和七年五月斎行の遷座祭に向かい益々のお力添えを賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。

謹賀新年

本年もよろしくお願いいたします

宮司　井上　眞澄
禰宜　井上　智澄

責任役員　永島　清孝
〃　永島　一雄
〃　越野　伸夫
〃　岩谷　英樹
〃　新見　光男
〃　田中　俊治
〃　若林　健一

総代会　会長　永島　清孝
奉賛会　会長　永島　清孝
敬神婦人会　会長　須山　紘美
氏子青年会　会長　永島　一雄
いざなみ会　会長　樫原　孝尚

昭和九年の遷宮で現在の社殿に新築されました

縣社 揖夜神社
けふ・本殿遷座祭
御神徳と由緒は深し
前後四ヶ年を費して造営成る
社殿善美を盡し
三万圓に近い巨費で遂成す
井上爲若氏談
氏子各位の努力の賜
佐々木三郎氏談
御神事

（昭和９年５月５日の正遷座祭当日の山陰新聞の記事）

※山陰新聞＝山陰中央新報

【新聞記事からの抜粋要約】

揖夜神社は、由緒すこぶる深く、古来から朝廷の御崇敬が厚かった事が立証されており、また歴代武将の崇敬も他に異なり、天正十一年（１５８３年）毛利元秋は社殿を建立。元和二年（１６１６年）堀尾忠晴は社殿を再建。松平氏に至っては、初代 直政が年中の祭事を執行させ、社殿の営繕は御修覆（＝復）社として藩御作事方の手により明治維新廃藩まで行われた。（その後は氏子）

本殿は、明治八年及び明治三十二年に上葺きをし正遷宮が行われたが、御造営以来三百余年を経ていることから大正十五年（１９２６年）十一月二十七日に假殿遷座祭を行い、以後御造営について調査研究が実施されたが、腐朽がその極みに達していることから、昭和三年三月に氏子総代で協議の結果、揖屋村自治協会の議に附し、御造営は軸建新築として経費二萬五千圓の予算を氏子と縁故者の寄附金による事に決定された。

昭和五年九月一日 御造営委員を選定したが、時恰も世界的財界不況（国内は昭和恐慌）に際会し活動意の如くならず、為に昭和七年五月に至り漸く着工する運びとなり二十八日 地鎮祭 釘始祭、昭和八年六月六日 本殿立柱祭、六月八日 本殿上棟祭を執行。特に木材は安来町 並河太助氏の製材により着々進行し、境内の古き森林とその他も整理して風致を増すと共に、神威発揚に努め茲に愈々社殿全部の新装を見るに至り、今日（昭和九年五月五日）之が正遷座祭を執行する事になったのはまことに慶賀に堪えない所である。此の喜びの日を迎え厚く各位の御努力に深謝の意を表する次第である。

大正十五年十一月二十七日　假殿遷座祭
昭和三年三月二十日　揖屋村自治協会の総会で社殿新築を決定
昭和三年四月一日　神殿新築奉告祭
昭和五年九月一日　御造営委員選定
昭和七年五月二十八日　地鎮祭 釘始祭
昭和八年六月六日　本殿立柱祭
六月八日　本殿上棟祭
昭和九年五月五日　大殿祭 御造営竣工祭
本殿遷座祭
新築は本殿 中門 拝殿 本殿透塀
中門透塀 境内社四社
改築修繕は神楽殿 社務所
御造営委員長　佐々木三郎
社　司（宮司）井上　為若
社　掌（神職）井上　護
設　計　山中　穎吉
大工棟梁　松浦仙次郎
寄付総額　三萬千百七拾参圓六十銭
（現在の貨幣価値で約七千万円）

穂掛祭と一ツ石神幸祭

令和三年八月二十八日の穂掛祭と一ツ石神幸祭は、新型コロナウイルス感染防止のため残念ながら二年続けて陸行列（提灯行列）が中止となり、規模を縮小して斎行されました。

八月二十日に一ツ石と境内御神木などの注連縄づくりがあり、二十二日には崎田地区の皆さんで一ツ石の清掃と注連縄の掛け替えが行われました。二十七日には氏子総代の皆さんで神船（神幸丸）の引き出しがあり準備が整いました。

二十八日当日に、穂掛榊（稲穂を榊に掛け瓢豇（ひょうとう）を付ける）が境内の七十五カ所に捧げられました。

午後三時より随神門脇の湯立所において神職により釜に湯を沸かす湯立神事が執り行われた後、そのお湯をつけた笹で神様がお通りになる道の露払いが行われました。

午後四時、参進（さんしん）により祭典が始まりました。令和二年九月に仮殿遷座祭が行われたため、仮殿（現在神様が鎮座しておられる神楽殿）において執り行われました。

穂掛榊と御神酒を捧げて豊作を祈念するする神事です

【付記】
社人は古来、石原・石倉・石本・宮廻の四家です

神様が社人に護られ、総代のお供により弁天灘へ向かわれます

一ツ石神幸祭は、大正時代には運搬船、漁船がたくさんあり、かんこ船、屋形船、手繰船、そりこ船と三、四十艘の大船、小舟がそれぞれ「揖夜大明神」の色どりもはでな幟（のぼり）をたてて神船にお供をしたもので、海上神事では近郷にまれな豪華版であった。

崎田海岸は古来、袖師（そでし）が浦と言われ揖夜神社の神域であり、祭事や祈祷の修練場であったとも伝えられる。現在の一ツ石（崎田鼻）は新・一ツ石で、旧・一ツ石は新田が出来てから海岸湾入りの奥になったため、現在の場所に遷（うつ）られました。旧・一ツ石は、今でも崎田地区の方により大切にお守りされています。

（東出雲夜話より）

（崎田公民館近くにある旧・一ツ石）

中門（八足門）の額修復なる

明治八年に奉献された「伊布夜神社」の額を昭和十年に続き、此度修復致しました。

この額は明治五年より出雲大社第八十代宮司を務めた千家尊福氏が揮毫されたもので、出雲大社と揖夜神社の特別な関係を示す一つとして大変貴重な額です。出雲国造家に生まれた千家尊福氏は出雲大社教の管長として全国に布教活動を進め、また貴族院議員・東京都知事・司法大臣等を歴任し、さらには文部省唱歌「一月一日」を作詞するなど宗教・政治・文化面などで大きな功績を残された偉人です。

本額は、従前と同じく中門（八足門）に掲げる予定です。

例祭（令和三年十月十九日）

例祭とは、神社に由緒ある日をもって行う大祭のことで例大祭ともいい、揖夜神社三大祭の一つです。午後三時三十分から祭事が斎行され、コロナ禍の中、昨年と同様に規模を縮小して、揖屋小学校の書道展・児童絵画展、奉納品の抽選が行われました。

当日はあいにく午後から雨模様となりましたが、約三百人がお参りになりました。

神職六人と総代による参進

いざなみ会の研修（令和三年十月二十七日）

いざなみ会の視察研修会、総会を実施しました。視察研修では安来市広瀬町西比田の金屋子神社、奥出雲町横田の稲田神社、亀嵩の湯野神社を巡り参拝しました。総会は玉峰山荘で行い、参加者は十八名でした。

稲田神社
稲田姫の生誕地に建つ神社

たたら製鉄七守護神として知られる金屋子神社

荒神さん

令和三年十月二十八日神社境内にある荒神さんのお祭がありました。向かって左側が東市場、右側が中市場・西市場・新中がお守りしている荒神さんです。新しく藁蛇（チーナマイト）を作り、一年間の無病息災をお祈りし、荒神幣を奉納します。

荒神信仰の起源は定かではありませんが深田家文書には天正十一年（一五八三年）にその記述があります。

左側の荒神さん

右側の荒神さん

「一年の計は元旦にあり」と言われます。新しい年を迎えて、旧年中神さまにお守りいただいた事に感謝し、「これから一年、この世の中と家族皆が幸多い年でありますように」と神社にお参りするのが初詣です。

先ずは、氏神様である揖夜神社へお参りして感謝と祈りのまごころを捧げましょう。